

[特別寄稿]

まちの色を問う 事例～金沢の橋の色

Inquiring about the Colors in the City: a Case of the Bridges of Kanazawa

山 岸 政 雄
YAMAGISHI Masao

はじめに

2016(平成28)年3月、政府は訪日観光客の誘致策として主要観光地の景観計画の充足を促した。2004(平成16)年の景観法を抛りどころに文化や町並みを生かした建物やまちの色、デザインも主要な項目となる。2020(平成32)年の東京オリンピックも視野にソフトターゲットとして国が強調し始めた意義は大きい。ここでは金沢の事例に触れながらまちの色を問うてみたい。

私が金沢の街景に色彩が潜んでいると直感したのは1955(昭和30)年金沢美大に入学した年である。第2次大戦中の1945(昭和20)年8月1日、新潟県長岡市で空爆を受け焼け野が原で育った私には、戦火を免れて輝く黒い葦と緑樹に覆われた用水、土堀越しの城下町の風景は別世界に見えた。(写真①)(写真②)黄橙や深緑の市電も大正ロマンのアクセントカラーとして眺めを広げ、まちの色を考える契機となった。さらにこのことが環境問題とりわけ社会環境の秩序に連なることを知ったのは、1973(昭和48)年のAIC国際色彩学会(ヨーク大学・UK)である。招待講演にて高名な色彩学者ビレン氏は、アメリカ軍の環境色の使用マニュアルを例に、建物や交通標識の色は公共財であって社会環境の秩序と深く関わりと示唆に富んだ例示をされた。帰途訪れたニュートンの聖地“ザ・ナショナルトラスト”(The National Trust)でも18世紀産業革命による風景や建物の破壊を阻止し公共の保全を果たす誇り高さ心映えを見

た。(写真③)この伝統はいまも家々の薔薇の手入れが美しい街並み保全の“言わずもがな”の作法として受け継がれている。まさに歴史都市金沢の色景保全と相通じる。この文化景観の継承研究は喫緊の課題と思い帰国した。はたして色彩環境はまちを救うのか。このことの予備研究に“歴史都市金沢の色”1977(NY)、“金沢の料理の色”1985(モナコ)、“雪国の新築住宅の色彩調査”1993(金沢)、“東京山手線沿線の色”1993(ブダペスト)、“世界遺産の色～白川郷・五箇山”1997(京都)、“日本の景観施策”1999(バンコク)等で追認発表を行いながら“言わずもがな”の色彩環境が焦点となることに辿り着いた。やがて21世紀を迎える頃から環境の持続性を問う施策が活発化し色彩環境も大気汚染や水質汚濁、騒音、地盤沈下、悪臭に加わるもうひとつの環境として注目され、考察も人間、社会、自然域に広がり科学的視座が厚くなった。ここでは、まちと色を繋ぐ視点を環境作法の憧憬的である“しかるべきものが、しかるべきところにある”を掲げたイギリスのシビックアメニティーズ法、1967(昭和42)年の理念に添い、その行きたるを明らかにし来る明日を考えてみたい。

I まちの色を問う～色彩環境備忘録

いまから半世紀前わが国では水俣病、新潟水俣病、四日市ぜんそく、イタイイタイ病の発生など相次ぐ環境汚染に対し公害対策基本法/1967(昭和42)年が

施行された。同時期にはこれまで経験したことのない景観の悪化を懸念した保全運動も始まりつつあった。金沢市伝統環境保存条例／1968(昭和43)年も先駆例である。1970年代にわが国は第1回国連人間環境会議で川端康成の「美しい日本の私」を範示にして環境立国を誓った。田中角栄提唱による「日本列島改造論」が謳われる一方で歴史的町並みの保存など環境権の芽生えが特記される。けばけばしく無秩序な色使いの町並みが景観問題として浮上した。都市に情緒の回復を謳い明治、大正、昭和の建築遺産を守ろうと日本建築学会も立ち上がった。流れは金沢東山地区など国の伝統的建造物保存候補地区の調査や、神戸港色彩計画など大景観の再認にまで広がっていった。1978(昭和53)年には金沢経済同友会、金沢商工会議所、金沢青年会議所の民間機構による「金沢都市美文化賞」が創設され誇り高さ景観を主導した。環境影響の事前評価を促すアセスメント(Assessment)の概念、手法も導入され環境新時代の到来の兆しを感じさせる。岐阜、富山両県を越境する庄川に架かる飛越7橋の“虹の架け橋”作戦は、橋梁の色彩を観光施策と結んだ成功事例として注目された。色彩教育もこのような時代を背景に景観や環境の調整ツールとしてより役立つ色彩を意識するようになる。ことに80年代になると色彩授業のコンピュータ化で色相、明度、彩度による色の外観や様相を伺い知る知覚定性的な授業から、測色と色度で特性を知る感覚定量的授業まで選択肢も大幅に広がった。さらに誰もが豊かな生活を享受する権利は、美しいまちに住みたい願いにも向けられ美的環境がもう一つの環境として意識されるようになった。さらに80年代は公共の色彩とは何かが問われた。東京都バスの黄色い車体／1980(昭和55)年、(写真④)は騒色問題に発展し、このことを契機に全国的なボランティア団体「公共の色彩を考える会」が発足、約100人の市民や専門家が2015(平成27)年まで調査や啓蒙活動を行った。追って国の基盤構築に社会資本のソフト化が唱道され直近の効果策として無電柱化が促進された。美しい環境と色彩をテーマに色彩講座も盛んに開かれ農漁村や里山の原風景の

保全も問われるようになる。さらに「快適な環境知見の高まりはAmenity」概念／1982(昭和57)年を誘い、漸増する国民の意識に応じて当時の建設省は「景」は見られるもの、「観」は見る心と定義をした。都市の風格と質を競うコンベンション(会議)都市構想がいわゆる“都市間競争”を先導した。後年、コンベンション都市の調査で訪れたバンクーバーでは“Yes We Can”(やればできる)運動の心映えが美しい街づくりと深く関わっていることを知った。続く1985(昭和60)年の国際色彩学会ではファッションカラーが議題化されるなどカラー情報のソフト化に拍車がかかる。のちに悪夢と気が付く円高バブル経済は、リゾート法(総合保養地域整備法)の施行／1987(昭和62)年を促し、これを盾にしてウォーターフロント(親水空間)、ライトアップ景観などが準備不足のなかで事業化され景観づくりは翻弄された。しかしながら成功例もある。金沢市の用水保全策は多くの部分で暗渠と化し駐車場となっていた市内を貫流する150余キロメートル余の用水を、わがまちを思う見識と精緻な手法で蘇らせた。バブル経済が終わり環境との共生、生態系に学ぶエコポリスの推進で公共のサイン環境等も見やすく分かり易い機能的な色使いの場が設けられるようになった。金沢市でも先の伝統環境保存条例を補完充足し「金沢市に於ける伝統環境の保存及び美しい景観の形成に関する条例」1989(平成元)年が公布され色彩景観も注力された。ちなみに10月4日を「都市景観の日」としたのもこの年である。90年代はバブル経済崩壊の後遺症からの立ち直りに環境負荷をいかに小さくするかが主題となる。景観条例の制定が相次ぎ／1990(平成2)年～1992(平成4)年、条例の順守など環境保全型社会への変革がもくろまれ持続可能な社会の構築やエコビジネスの重要性が唱えられた。一方個人能力の向上こそ社会の礎であるとして“一人一技”の生涯学習志向が広がり資格検定制度が脚光を浴びる。文科省後援「色彩検定」(公益法人・色彩検定協会)では、1990(平成2)年の設立以来120万人余りが受験活用している。色彩の芸術・心理・物理、環境を網羅し生徒、学生、市民の受験者

も多く今日では“もう一つの社会教育”となっている。快適な住まい環境に不可欠な環境基本法もようやく1991(平成3)年に施行され美的環境の躯体が整ってきた。併せてまちの色を考えるうねりも大きくなり京都、神戸、釧路などで先駆的な色彩景観シンポジウムが開かれた。金沢市のまちと色の景観施策として発足した屋外広告物審査会制度などが全国モデルとなり取り組みを披露する機会を得た。(写真⑤) ちなみに同審査会は金沢市景観対策課及び屋外広告物団体、金沢美大教員で構成され年間およそ400件の屋外広告物を景観条例に照らし審査をする。当然のことながら色彩環境整備の自助努力が進むにつれて他都市、他国との情報交換と比較のため視察が盛んとなる。備忘では高層ビル群の大景観(サンフランシスコ)や景観条例における色彩修復の在り方(ホノルル)から教示を受けた。他国の色彩文化に接しながらまちの色と日本伝統色の調和の重要性に視線が向けられた意義は大きい。さらに色彩施策を必要とする場合は都市のみならず農村景観の悪化と向き合うこととなる。自然回帰と言われるビオトープ環境や生態系の保全にも水景や山野の色彩保全が希求され景観色の学習気運が高まった。環境知の広がりには持続可能で柔軟な社会を担保するために祭礼の彩りや友禅流しなどソフト景観にも関心が向かうようになった。90年代の半ばには増大する自動車事故の減衰策としてバスレーンのカラー化が推進された。金沢市の場合、国道管轄の部局によって郊外に実験用カラーレーンが設けられ、明視性や識別効果などを検討した結果、濃い茶系を選び伝統都市の景観と調和させた。この金沢発の配色例は全国に広がった。時として無意味の景観論争もあった。国難と化した阪神淡路大震災、1995(平成7)年1月17日の復興を巡って都市美よりライフラインの復旧無くして都市美は無いと喧伝されたが神戸は一層美しい街づくりに専心している。両者に後先はない。90年後半は重厚長大から軽薄短小の世相の中で都市はホスピタリティ(歓待、親切、もてなし)空間の創造競争に入り、色彩景観も心地よさを誘う詩的な彩りなどファッショナブルな色が好まれ、肌色と衣服の

色彩調和に気配りする“パーソナルカラー”の手法が多く女性を魅了した。1997(平成9)年の国際色彩学会(京都)では喫緊のテーマとして古都保存と色彩、伝統産業と色彩、町並みと色彩、文化財と色彩を巡って多くの発表、討論が行われた。(写真⑥) 21世紀を迎えるとフランスの色彩学者ランクロ教授によって「色彩地理学」が体系化され学の橋頭堡を得た。フランスに始まりヨーロッパから世界各地のまちの色を土塊、スケッチ、写真で採取分類しその様相から景観の成り立ちを実証する壮大な始祖的研究である。このような学の成立を愛でる背後でわが国の色彩景観は深刻な破壊の危機に直面する。日々拡張する都市の彩りは想定外の環境問題を誘発し、過激な色彩建造物、都市の空洞化によるまちの色の喪失、巨大で喧噪な配色の屋外広告物の氾濫など景観条例の適応不能が発生した。追手のラッピングバスによる景観破壊も日本美の根底を揺るがす様相源ともなった。対応を迫られる色彩授業では景観施策の手法演習などカリキュラム構成に多くの時間を費やした。金沢市の国の重伝建地区(重要伝統的建造物群保存地区)における色彩景観との関わりも例外でない。東山ひがし・2001(平成13)、主計町/かずえまち・2008(平成20)、卯辰山麓・2011(平成23)、寺町台・2012(平成24)年は京都市、萩市とともに一市で最多の4地域が指定されその保全、保護、保存が目されている。次第に環境への注視は到来する少子高齢化による農村景観の悪化を危惧し、日本の原風景の保全対策と相まって火急の課題となった。対策として農水省の依頼を受けた多摩美術大学環境色彩研究会との共同研究では、農村環境の色彩調査手法/2002(平成14)年を開発した。専門家を待たずとも色彩景観を適時容易にデータ化する手法として普及した。2004(平成16)年には待ち望んでいた景観法が施行され色彩も到達景観の主役になった。ちなみにイギリスのナショナル・トラスト運動から一世紀遅れの環境保全策である。都道府県、政令指定都市、中核市など131自治体で始動、色彩やデザインへの配慮が義務づけられた。色彩教育では景観法という上位法のもとで色彩を論じ演習する事由が担保され

同時に関連の色彩研究の増進にも繋がった。顧みるに金沢市は21世紀を迎え輝く色彩景観創生年を迎えている。事例では白亜の金沢21世紀美術館開館／2004(平成9)年、金沢港色彩計画の起動／2007(平成19)年、金沢の象徴・犀川大橋の色彩修景やラッピングバスのデザインに～あなたのご意見お聞かせ下さい～を募る社会実験の導入／2008(平成20)年、2010(平成22)年には地域主権と景観施策の分散処理化をめざし個性的ながらも普通の景観を評価する時代に入り「金沢都市美文化賞」も即応した／2010(平成22)年。金沢市民景観会議で試みられた景観の事前評価への市民参加も画期的である／2010(平成22)年。市民注視の北陸新幹線金沢駅の色彩計画では機能と装飾の融合に主格が置かれ賑わっている／2011(平成23)年。ホスピタルギャラリー～病院が美術館になる日～安らぎのいろ・かたち・味わいアートプロジェクト・金沢市立病院+金沢美大では病院の待合ホールおよび周辺のスペースが展示会場となり患者・職員・市民の色彩豊かな習作、傑作が展示される。美的環境が癒し空間を醸し色彩療法に繋がる好機も想定される／2012(平成24)年。少子化社会を担保する試みとして子供と色彩景観の関係について金沢学院短大生による調査があった。通園時に子供が受ける景観色はなに色かを子供の目線1.5メートルを想定し金沢市街で行った官能調査で、チャイルドビジョン“木色で紡ぐ金沢の心”として報告をした／2008(平成20)年。金沢の景観色では消火栓ポール、駐車場のかなざわらしい木色(もくじき)、まちなり自転車の緑色、ソーラー屋根と黒い葦の景観調和の検討／2012(平成24)年など多くの事例が美しいまちづくりを担っている。金沢らしい夜間景観整備計画(ライトアップ)も多彩な手法で評価を高めた／2014(平成26)年。

縷々述べてきたように折に触れ色彩教育の必要性を思い出に2001(平成13)年に金沢美大で定年を迎えた。その後、色彩時代の文化の継承を目指す金沢学院短期大学カラー・ビジュアルデザインコースを担当することとなった。色彩についての知見学習を専門とした短期大学は全国初めてでさらなる“役立つ

色彩”と環境問題をリンクする授業と研究に及ぶこととなった。顧みるにわが国の色彩教育の歴史は1873(明治6)年に東京師範学校における教則本で「色の図」を理解させたのが始まりで「問答」形式で4年生を対象とした。(山形寛1888～1972述) 明治、大正と爾来変遷の歳月を刻み、1949(昭和24)年東京で「色彩教育研究会」が発足したころから大学でも本格的な色彩教育が開始された。色彩が環境改善の規範となったのは1955(昭和30)年頃からで品質管理や安全色など生産力向上を旨とする時代背景とも合致していた。以降の半世紀は概ね前述の世相に添ってそれぞれの教育機関でカリキュラムが生まれ推進されてきた。大学・短大・専門学校の色彩カリキュラム調査・日本色彩学会でも動向が伺える。上述の事由で開設した金沢学院短大におけるカリキュラムは、金沢美大時の経験を踏まえながら科学と芸術、基礎と応用及び地域貢献の視点から科目を用意した。前者では色彩科学論、色彩心理論、色彩史、色彩環境論、照明論等に加え高度な色彩演習に単位配分を試み、後者では金沢のまちの色と環境保全を理解するカリキュラムが生まれ地域貢献のアンテナ密度を高くした。教育スタッフには常勤と併せ当該する学会や大学、県など公的機関から単元ごとにきめ細かな授業支援と協力も得た。このことを可能にしたのは設置者の理解と歴史に培われた金沢文化の濃さにあった。金沢には色彩で誘われる伝統的工芸品が多彩で九谷焼、加賀友禅、金沢箔、金沢仏壇、金沢漆器、郷土玩具、金沢和傘、加賀水引細工、加賀獅子頭など重厚な歴史がある。さらには和菓子や美味求心の加賀料理の配色美は感性情報として拡張されて色彩の産業化と繋がっている。彩色都市をもって任じる環境で色彩を学ぶことの意義は大きい。近年の色彩授業では例えば演色効果を知見する方法は投光実験からディスプレイ上のシミュレーションに代わるなどデジタルカラーデザインが想起されている。やがて見たつもりのような仮想現実や3D拡張現実の代理体験と向き合う色彩教育も普段のこととなるだろう。

これまで、色とは何かを考え多様な色の世界を知見

してきた。色は社会や環境との実体験で担保されたとき“まちの色を問う”備忘録となる。



①金沢の葺・1965(昭和55)年頃



②木色(もくじき)のひがし・1965(昭和55)年頃



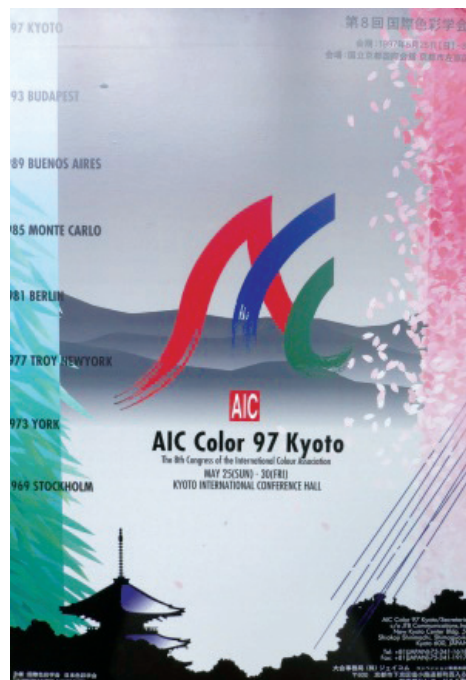
③ナショナルトラストの標識
ニュートンの生地にて・1973(昭和48)年



④都バスの黄色問題1980(昭和55)年



⑤屋外広告塔の乱立・1991(平成3)年頃
望見：金沢市武蔵が辻



⑥国際色彩学会“KYOTO”1997ポスター (D. 筆者)

II 金沢の橋の色 ～色彩修復 (Color Restoration)

金沢の街を流れる犀川と浅野川には50余の橋があって、文学作品にも多く語り継がれてきた。犀川大橋、桜橋には室生犀星が、浅野川大橋、中の橋、梅の橋、天神橋には泉鏡花や徳田秋聲のイメージが重なる。浅野川大橋と犀川大橋が現在の姿になったのは大正ロマンの薫る時代で、90余年を経たいま国の登録有形文化財として歴史的景観に寄与している。

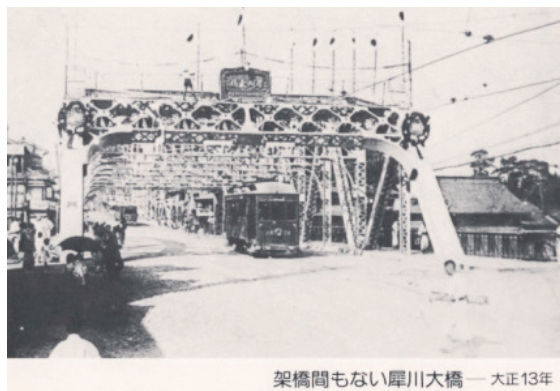
橋はその姿、形、素材、色で街の文化を繋いでくれる。なかでも色は“公共の色彩”として市民の合意を得ながらおよそ10年ごとに塗り替えられるが、今回は金沢らしい色彩作法で選ばれた橋を巡ってみたい。

室生犀星の随筆「犀川大橋」に……40年前は白いペンキ塗りの頑丈な木橋だったとある。1898(明治31)年に架けられた異国肌の橋をどんな思いで見たのであろうか。犀川大橋と色の始まりである。

部名	材料	寸法	数量	備考
大橋	木	幅員23m	1	室生犀星の随筆「犀川大橋」に……40年前は白いペンキ塗りの頑丈な木橋だったとある。
橋脚	木	高さ10m	2	
橋桁	木	長さ62m	1	
橋床	木	幅員23m	1	
橋柵	木	高さ1.5m	2	
橋上	木	幅員23m	1	
橋下	木	幅員23m	1	
橋脚	木	高さ10m	2	
橋桁	木	長さ62m	1	
橋床	木	幅員23m	1	
橋柵	木	高さ1.5m	2	
橋上	木	幅員23m	1	
橋下	木	幅員23m	1	

「魅せられて犀川大橋」
監修：国交省・金沢工事事務所／北陸建設弘済会発行
(平成14)より

その後の鉄筋コンクリート橋は1922(大正11)年8月3日の大洪水で落橋し1924(大正13)年に現在の鉄橋となった。長さ62m、幅員23mのねずみ色で街の陰影と呼応した迫力を感じる。1998(平成10)年には「日本百名橋」(鹿島出版・松村博著)に選ばれている。



架橋間もない犀川大橋 大正13年

1924 (ねずみ色) 国交省



1930頃 (カーキ色) 国交省



1975 (白系クリーム色)

昭和初期の1930(昭和5)年前後にはカーキー(泥土色)で太平洋戦争時は街の景観色に紛れた迷彩になったと思われる。1957(昭和32)年の大修理の数年後、三島由紀夫はSF的小説「美しい星」の取材旅行で犀川のほとりで宿泊しているが犀川大橋の印象はどのようなであったのだろうか。より金沢らしい色

を求めて1966(昭和41)年には薄いカーキ(泥土色)になった。土塀の色がイメージの下地になっていると思う。白い京都タワーが街景にそぐうか否かなど色とまちのらしさが問われだした時代でもあった。1975(昭和50)年には白系クリーム色が選ばれ、明るさの対比効果によって曇りの多い金沢にもうひとつの風景が蘇った。この頃神通川に架かる飛越峡合掌



1984 (黄緑色)



1993 (青灰色グラデーション・国交省)



2008 (青灰緑グラデーション)



2008 (色彩事前評価-犀川大橋)

ラインでは七橋が七色に塗られ観光橋が目立っている。1984(昭和59)年に犀川大橋は還暦を迎え、色は市民アンケートやカラーシミュレーターで事前評価を行い黄緑色が選ばれた。公共の色彩の作法としても注目された。

1993(平成5)年には金沢らしさを表すアクセントカラーとして日本伝統色の浅葱(あさぎ)、空(そら)、納戸(なんど)などから青色系を導き出し、加賀友禅にちなんだ馴染の自然配色である青灰色系グラデーション(縹緗彩色調)が提案された。2008(平成20)年では配色比は同一の青灰緑のグラデーションとなり今日に至っている。

さらに金沢らしく彩られた橋を訪ねてみたい。高欄に灰桜色の花びらがあしらわれた桜橋1963(昭和38)年は、島田清次郎の名作「地上」(1922・大正11年)の舞台でも知られる恋愛文学橋である。



桜橋 (灰桜色)



雪見橋（ステンドグラス風）

より上流に架かる雪見橋1998(平成11)年は、高欄に尾山神社神門のステンドグラスを模して透過色が楽しめるデザインとなっている。下って上菊橋2005(平成17)年、のアーチ部は自然景観と同化する草緑の配色で橋の上には花壇が作られた。手入れは橋のたもとの町会が公共養子のように面倒をみている。



上菊橋（草緑色と花壇の彩）

中流の御影大橋2005(平成17)年は、弓形をしたアーチ橋で金沢の望景に合わせた灰桜色と銀ねずみ色でまとめている。現地で候補色を並べての事前評価によって、伝統と現代が手を繋いだ格調高い景観が生まれた。



御影大橋（灰桜色+銀ねずみ色）



旧橋で候補色の事前評価

橋の色は浅野川を女川と言うように情緒的な由緒から見立てられることが多い。泉鏡花の「由縁ゆかりの女」には、～俗に女川だと言うだがね～とある。



浅野川大橋

1594(文禄3)年の前田利家の架橋に始まる浅野川大橋(長さ54m幅員16.5mアーチ橋=3径間連続アーチ橋)1922(大正11)年は、1943(昭和18)年の太平洋戦争で、鉄製の高欄や照明灯は戦時抛出され木製となった。1950(昭和25)年に改修された後、元橋への修復が待たれていた。現在の色は1989(平成元)年に界隈の艶やかな景色を誘うデザインで復元されている。側壁は医王山の赤戸室石に寄せた白濁の臙脂(えんじ)を白御影石で囲った調和配色である。加えて臙脂や藍、古代紫の友禅流しも橋を引き立ててくれる。ちなみに徳田秋聲が小説家を志すきっかけは、1889(明治22)年この橋の上で旧四高の上級生、佐垣帰一に「君なんか小説家になるといいがね」と言葉を掛けられたことによると言う。梅の橋は1949(昭和24)年の水害で失われてから久しい1978(昭和53)年に再架橋された。来歴に配慮し鉄製擬木ながらも橋脚の色などに丁寧な配色がなされている。芝居「滝の白糸」で知られる泉鏡花の小説「義血狭血」(1894・明治27年)に描かれた名橋でもある。



梅の橋(木色・もくじぎ)色彩検討

天神橋1955(昭和30)年は、明るい灰色の弦形タイドアーチで金沢を映じている。塗り替え年でもあえて変更をしない作法で歴史を繋いでいる。さらに金沢を象徴する橋に城下の遺構、東惣構堀に架かる枯木橋1892(明治25)年がある。高欄には赤戸室石と青戸室石の二色配色が見られ格調が高い。市街の54水路150kmの用水でも戸口、入口に架かる小さな橋が用水愛護の表情を競っている。橋の博士、小堀為雄先



天神橋(明るい灰色)



枯木橋1995修復(赤戸室石+青戸室石)

生は、橋は「此方」から「彼方」へものを渡すものであると言われた。上述の事例に関わりながら橋の色やデザインの有様はまちに豊かな感性をもたらすと実感した。色彩作法を大切にする金沢でありたい。

(やまぎし・まさお 本学名誉教授/色彩学)
(2016年10月31日 受理)

